

「ぶたばんだ」の文法

京都教育大学助教授

森山

卓郎

先日、四歳になる末の娘と、そのいとこの同じく四歳の男の子を連れて近くの公園に散歩に行った。なぜかジャンボ公園と呼ばれている小さな「公園」で、遊具などがいくつしか申し訳程度に置いてある。

ところが、着いてまもなくふと気がつく。二人が取っ組み合いのけんかをしている。それとなく聞いてみると、原因はなんとコンクリート製の小さな滑り台の動物がブタなのかパンダなのかという見解の相違なのであった。

大人の目には、どうやらそれは象の形をしていて、その鼻の部分が滑り台になつていたようなのだが、肝心の鼻が途中でとれていて、確かによくわからない。鼻が折れているから、ブタというのはわかる。正直なところ、なんでパンダなのかはよくわからないのだが、まあ、目の回りに汚れもあるし、色も白っぽいから、パンダであつていけないというわけでもない。二人は、しつぽがどうだとか、顔がどうだとか、それなりの論拠を述べて主張をゆずらない。耳がとんがっていなくて、ぶたのようではないようにも見えるなあ、とか、目が普通の

パンダとも少し違うかもしれないなあ、とか、いろいろと話していたのだが、ふと、「そうや、これはぶたばんだや!」と言ってみると、先ほどまでのけんかがそのように鎮まって、紛争は田満に解決したのであった。

学術論争の決着はいずれが科学的に説得力があるかという点に求められるのだろうが、このブタ・パンダ論争のような単純な見解の相違の解決は、妥協しかない。どちらの顔も立てる「ぶたばんだ」は、その意味で、幼児のけんかながら紛争仲裁の本質に迫るものである。

たかがぶたばんだ、されどぶたばんだ。

しかし、文法的に考えると、ことはそう単純ではない。

実は、「ぶたばんだ」は、「ブタ」「パンダ」の中間的妥協案ではないのである。なぜならば、「そうあざらし」「や」「おにやんま」、あるいは「はちどり」「はいずれも」「そうとあざらしの中間」「や」「おにとやんまの中間」、あるいは「はちと鳥の中間」ではなく、あくまで、「あざらし」「やんま」「鳥」だからである。

ここに日本語における複合語の基本的なルールがある。日本語の複合語のもっとも一般的なルールにのっとれば、「名詞1+名詞2」という複合語は、基本的に「名詞2」が意味の中心を表し、ふつうはいわば「名詞2」の種類を表すことになる。

もっとも、並列的に並べられた「金銀」は、「金と銀」をあらわすのであって、「銀」の一種というわけではない。これが例外となるように、あくまでここのルールは、絶対的なものではないのだが、それでも、大体は成立するという一般性をもっている。例えば、「つみびと」は「人」であるし、「体育学校」は「学校」、そして、「パイナッフルケーキ」は「ケーキ」である。思いつく言葉を考えると、まあ、大体はこのルールになっている。

おもしろいことに、外国語でも同じかというところについてはない。例えばタイのバンコクに行くと「TAXI METER」と書いた車があちこちを走っている。なんでタクシメーターが走っているのか、あれはタクシメーターのものではないかなどと思ってしまうが、実は、タイ語の名詞句の構造はつじろから前の名詞を修飾するようになっていて、前の「TAXI」が中心となる語になる。つまり、「TAXI METER」は「メータータクシメーター」という意味なのである。ちなみに、メーター制でないタクシメーター以前はよく走っていたらしい。さて、「ぶたばんだ」に戻るが、以上のように文法にこだわって考えると、「ぶたばんだ」は、あくまで「ばんだ」の一種ということになる。その意味で、「ぶたばんだ」は決し

て中間的な妥協案ではなく、「ばんだ」派が勝ちという案なのであった。

もし、二人が「文法」マニアの幼児であれば、「ぶたばんだ」か「ばんだぶた」かをめぐって改めて鋭く対立し、再び取っ組み合いのけんかが始まるころであつたが、幸が不幸かそうではなかったため、それはなかった。もちろん、こちらもそんなことを言い出してせつかくの子どものたちの和平を破るつもりは毛頭なかったのだ。そこは口をつぐんで何も言わなかったのだった。

意見が対立するとき、妥協ということが必要になる。しかし、みかけの妥協案の怖さというものもある。一見中間的な妥協のように見えて、その実、そうではない、ということもあるのだ。言葉の意味とは深いものだ。

しかし、もっとも、今回の事例では、逆に言葉にそれほどこだわらなかつたからこそ、妥協が成立したという側面も指摘できる。そういう逆の見方をすれば、こつとも言えるかもしれないのだ。むしろ、そんな言葉のはしほにこだわらないからこそ、平和的解決ができたのではないかと。

「言葉にこだわれ」という意見が正しい一方で、「言葉にこだわらずに」という意見もまた時には真実なのかもしれない。

白色のペンキの剥げた「ぶたばんだ」が、夕陽らしくなつた光を受けて、なぜか、大変に意味深げに見える午後なのであった。